

# 寺田透の徳田秋声観

井 田 琇 穂

## 1

本論文は、寺田透（1915-1995）の徳田秋声（1871-1943）観を扱う。寺田は文芸批評家、小林秀雄（1902-1983）の影響を強く受けて出発したフランス文学者であり、文芸批評家である。寺田が太平洋戦争時、徳田秋声など何人かの作家に親近感をいだいたことが、寺田の文にある。寺田が徳田のどのような点に親近感をいだいたのかを本論で検証する。それと同時に、太平洋戦争前後の寺田透の個人史を扱う。本論の目的は、太平洋戦争前後に活動を始めた日本の文学者の仕事の内実の検証である。本論は先に発表した「寺田透の夏目漱石観」に続くものである。<sup>1</sup> 前稿で、「寺田の評論が広範囲な言語表現の世界を開き、その内実を教示してくれた」（「寺田透の夏目漱石観」、p. 303）と述べた。寺田透の全評論についての筆者の感想を、上の自己引用が要約しているが、本論の目的は寺田の初期の仕事の内容を、特に今回は徳田秋声論に限って、追跡することにある。

## 2

寺田透が徳田秋声に親近感をいただいていたことは、彼の「戦後派文学」（1967）に次のようにある。<sup>2</sup>

（…）その野間〔宏〕氏まで含めて、四人〔椎名麟三、埴谷雄高、武田泰淳、野間宏〕が四人とも、超絶的なものに強く惹かれる関心の持主だといふことをここに想起しやう。

キリスト、ブッダ、大雄〔佛の尊称〕、異端の教祖としての親鸞、目に見えぬところに発源地を持ち思弁されるものとしての政治、また

現世の不条理。

僕が白鳥や泡鳴や秋聲や、葉山嘉樹を僕流に見出したとき、かれら[戦後派文学の四人]はさういふもの[キリスト、ブッダ、親鸞、政治、不条理]に接近してゐた。

(…)秋聲のうちには、自然主義の莊嚴を語る慈悲があったのだ。(『評論Ⅱ－Ⅱ』、p. 136) (以下、特に断らない限り、[ ]内は引用者による)

この引用の前の箇所、寺田は戦後派文学の上記四人に仲間意識を持ち、自分は戦後派の片割れだと触れる(同、p. 129)。これら戦後派の文学者の特徴は、「通念の破碎、自己流の世界像構成のための原理の所有」(同、p. 129)にあると寺田は言う。上記、引用文の中で正宗白鳥以下の四人の作家を自己流に寺田が見いだしたとあるが、本論は、その中の徳田秋声に焦点を当てる。戦後派文学者の一人としての寺田にとって重要な発見となった作家たちの一人、秋声に具体的に寺田が何を発見したか本論で考えたい。寺田自身、上記四人の作家たちと同様に、超絶的なものに惹かれる体質をもっていたことを以下、示したい。寺田の場合は、仏教的な慈悲に惹かれたと言いうる。

寺田透には徳田秋声論が二つある。「徳田秋聲」(1948)と「秋聲の私小説」(1951)である。前者は寺田33才、後者は36才の論である。太平洋戦争の敗戦時(1945年)、彼は30才であり、これらはその直後に発表した論である。

### (1) 「徳田秋聲」(1948)<sup>3</sup>

この評論では、愛欲の問題、「非知識人」秋声、日本の心境小説の問題が扱われる。秋声の作品世界が描く「愛欲の、悶えと濃さ」は、われわれ自身のものであると寺田は述べ(『評論』Ⅰ－Ⅰ、p. 184)、次のように続ける。

(…)女に惹きつけられ女をいとひながら女から離れきれない欲情そのものの重みや手ざはりを文字によって盛り上げる文学的魂の営みに関心を抱き、芸妓やお酌ではなしに女そのものを見定めたいと思ふなら、(…)君はそこ[秋声の作品]に君自身が描かれてゐると信ずるであらう。(同、p. 185)

寺田は秋声の作品世界の特徴として、このような男女の愛欲の問題をあげる。

女性そのものの描写について、秋声、永井荷風（1879-1959）、里見弴（1888-1983）を比較して、三人の作家の違いを次のように寺田は指摘する。

（…）同じ花柳界の女を描いたにしても、永井荷風や里見弴の作品は、辛うじて風俗のわくによって支えられてゐるか、あるひは巧者な話術への興味によって賑ははされてゐるにすぎないのだといふ感じが、生々しく感ぜられて来る。（…）われわれは彼等によって裸にされるかはりにお仕着せを着せられてしまふからだ。（同、p. 186）

ここで作者（秋声）によって読者が裸にされる、即ち、裸の自分自身に直面させられることを、寺田は高く評価するのが分かる。さらに秋声の描いた女性が読者に、読者自身の生を感じさせると、次のように寺田は言う。

（…）われわれの人生と同じ人生をつぶさに生き、（…）確乎とした人生の地盤を占める人間の姿が、われわれをしてわれわれ自身の感懐と運命とに思ひを馳せさせずにはおかないやうに、素朴に自然に描かれてゐるのだ。（同、p. 186）

次に、「非知識人」秋声に関しては、秋声には知識人特有の観念性がないと寺田は言う。ここで「非知識人」とは知識人ではないということである。秋声がいわゆる知識人ではないと、寺田は考える。自分の肉体で納得した世界を小説で秋声が扱ったということである。寺田は次のように言う。

むろん、その〔秋声の作品が達成した〕解放には何ら理想的なもの、理論的なものはありはしない。大学の教授方や又余りにも政治的な人間にとってかかる解放は無意味に等しいであらう。しかしそれは自分の心の襞に一たん巢食ったものしか表現することを好まなかったこの多産な非知識人秋聲にとっては、それはそれでもいい別の世界からの不平であらう。（同、p. 200）

作品とは、秋声の心が彼の回りの現実と出会い、時の経過と共に心に定着した彼の出会った現実を文章化したものであると寺田が言っている。秋声が出会った現実が、彼の心に定着する時間が必要であったことがここで分かる。

ここで、秋声の作品には無現実と無理論しかないと批判されることがあるが、その批判は秋声に関係だと寺田は言う。そして秋声の作品の登場人物の堅固な実質感の由来を次のように寺田は説明する。

人間には肉体が一つしかないといふ事実を本能的な確かさで胸裡に抱いて放さなかった秋聲の人間認識からしかその来るべき場所はない。  
(同、p. 195)

これは秋声の実体論的な人間認識についての指摘である。

さらに、秋声が自己の現実を見る態度については、次のように、明治、大正時代の心境小説家と比べて、寺田は述べる。

われわれの近代文学には、心境小説家と呼ばれる文章家の数は非常に多かった。しかし、彼等は殆どすべて、文学のために自分の心境をいたはり、育み、あるひはいぢめつけ、時には犠牲にさへする文章の専門家であった。それらに比べると、秋聲ははるかに深く自己の心境、つまり自己の現実に対する敬意を、敬意といふよりももっと直接的な慈悲に似た関心を胸の底にたくはへてゐたやうである。(同、pp. 187-188)

このような秋声の自己の現実に対する慈悲に似た関心に寺田は惹かれたのである。この慈悲に似た関心を寺田は仏教的な精神現象学と関連づけているが、この点は、本論の「秋聲の私小説」(1951)で扱う。

ここまで、秋声の愛欲の深さ、「非知識人」秋声、自己の現実に対する慈悲に似た関心をどのように寺田透が考えているかを見た。

## (2) 「秋聲の私小説」(1951)<sup>4</sup>

これは秋声についての寺田透の二つめの評論である。この評論では特に、秋声晩年の二作品、すなわち『仮装人物』(1935-1938)と『縮図』(1941)とを寺田は比較し、考察する。<sup>5</sup> 前評論で、秋声を非知識人と規定したが、この評論では秋声が自分の感性だけを信じ、記録したと次のように論を展開する。

(…)これが徳田秋聲の場合であるが、自分の文学の変化と進展のために自分を変へる必要のあることが感ぜられても、積極的に真剣に、人間的立場から自分を変へようとはせず、かへってさういふ天然自然の自分のうちに投ぜられる外部の事件や人間を、その場で深く見きはめようと努力することによって自分を深める、意志や道徳を無視して深める人間の、自分の感性の要求にさからはぬ記録であらう。(『評論 I - II』、pp. 388-389)

自分の外界の出来事を深く見極めることで自分を深め、その際、自分の感性だけに従う態度を秋声が持っていたと寺田は指摘する。この際、意志とか道徳とかは関与しないというのだ。ここでも、「非知識人」秋声という寺田の規定が関わってくる。寺田の考えによると、根本的に秋声はどのような外部の影響があっても、彼の感性は変わらないということで、ここに秋声の生来の頑固な点があると考えられる。このような秋声に寺田は自分自身の求める実体論的な人間認識の具体例を見たと言っている。

この論でも、秋声の作品が知性によって輪郭づけられていないことに次のように触れる。

(…)かれ[秋声]にとっては下等動物にとってと同様、目の前にしか現実はないのだから。従って妻の生きてゐるあひだかれは他の女に心を奪はれることがないのだ。しかしかれは、意識的にさう生きるのではいけないことも知ってゐる。意識的であることそのことがいかがはしいことなのだ。(…)徳田秋聲の自伝的作品がなんら知性によって輪郭づけられてゐないのに、いぶしのかかった象徴的性格を輝かし、凡百のワタクシ小説につきまとう匠気—遊離した感性の洗練を感じさせないのはそのためである。(同、p. 389)

ここで、「遊離した感性の洗練」とは、肉体から感性だけが遊離し、その感性が極度に洗練されているということだと思われる。秋声の場合、肉体から感性が遊離していない、すなわち、肉体の存在を感じさせる感性を持っていたということである。ここで、実体論者としての秋声を確認できる。引用文中の、「下等動物」とかという表現は、秋声への皮肉や非難ではなく、秋声

を積極的に寺田が評価していることを前提とした言葉である。秋声は自分の目の前の現実だけを問題とし、自分の行動に対して自意識過剰になっていなかったと言っている。過剰な自意識にとらわれないのが秋声の生来の特質だと寺田が考えているようである。もちろん、これは寺田が理解した秋声像であり、ここでは寺田の論の輪郭を追う。

次に秋声晩年の私小説『仮装人物』と『縮図』についての寺田透の発言を見る。まず、これら二作が、思い出（追憶）の形式をとっていることを指摘する（同、p. 390）。その上で、前者の構成上の問題点と、後者の完成度に焦点を当てる。『仮装人物』の作品としての構成上の問題点について次のように寺田は言う。

(…)ここに葉子がよく書けてゐるといふのは、葉子の肌ざはり、葉子の性分、葉子の面影、要するに稲村庸三の感性に現像された葉子が書かれてゐるといふだけのことで、庸三から離れたところにゐる葉子の行為までが書かれてゐるといふことではない。葉子は建築的にあるひは和声法的に造型はされてゐず、従つてかの女が飲みこまれながら形作る社会も描き出されるに至らなかつたのである。（同、p. 391）

この指摘は、秋声が葉子のモデルである山田順子の全ての行動を把握できていなかったことに関係する。山田順子は、自分の行動を全ては秋声に語らずに秋声を去った女性であった。即ち、山田順子は秋声にとって謎に満ちた女性であった。それ故、『仮装人物』は寺田が指摘するような庸三から離れた所にいる葉子の行為が書かれていない作品になつたということである。この点では秋声は自分の知っている範囲内のことを書いたといえる。このあたりの秋声の伝記上の事実は、本論の後の部分で扱う野口富士男の著作に詳しい。

これに対して『縮図』については、次のように寺田の評価は高い。

「自然主義の莊嚴」といふことは、これを抽象的にいへば、ひとのあるがままにひとを生かし、みずからも損なわれずにあるといふことであらう。(…)『縮図』の三村のやうに、女の思ひ出話そのもののなかに自分を消してしまふことができるやうになつて初めて、「自然主義の莊嚴」といふことは言ひうるのである。（同、p. 392）

つまり、秋声が『縮図』で、主人公銀子の生涯を描く時、彼女の全てを描いており、ここでは秋声は銀子のモデルである小林政子の全てを熟知していたということである。『仮装人物』では稲村庸三が葉子に振り回される様子が明白であった。それは、秋声が山田順子に振り回されていたということにはほぼ等しい。秋声の晩年の二作品は、その中の主人公のモデルを確定でき、秋声の実生活を大筋で描いていると、考えることができる。もちろん、この際、実生活を、フィクション化していることは考えないといけない。寺田は小説作品が元来フィクションであることを強調する（これは本論の第3節で扱う）。『仮装人物』で稲村と葉子の進行形の恋愛を混沌の状態に描いたが、『縮図』では銀子の生涯の描写が中心であったのである。

さらに寺田は、秋声が文学上、達成した境地を仏教的な精神現象学で解明すべきであると、次のように言う。

(…) 秋聲の業歴にみとめられるやうな精神の脱皮が、つひにそのひとに自覚させた「自然主義」なるものは、これを西洋の文学の流派の精神と照し合はせて批評してみたところではやうのないものだらう。情念が情念のまま純化されて、一つの思想の姿を帯びた場合、と言ったらいいのであらうか。これは (…) 仏教的な精神現象学とでもいふべきものによって解明された方がいい何かである。(同、p. 393)

秋声の自然主義は、西洋のそれとは無関係に独自に秋声が達成したものであると、寺田は考える。ここで、寺田が仏教的な精神現象学というのは、上記引用中（「秋聲の私小説」、p. 392）の「ひとのあるがままにひとを生かし、みずからも損なわれずにある」という内容と関係すると思われる。すなわち、他人の生を容認し、自分自身の生も完全である状態、言い換えると、自他の生の共存の成立する状態を寺田は述べていると思われる。この程度の簡単な解説にここでは止める。本来は、寺田の仏教への深い関心（道元への傾倒）に触れないといけないが、これは大きな問題であるので、これ以上、深入りをしない。

## 3

この節では、1950年代から1960年代の上記以外の評論で、徳田秋声と日本自然主義文学に言及する寺田透の評論を扱う。具体的には日本自然主義文学の特徴と、秋声の小説の中に描かれる社会についての寺田の考えを見る。

日本自然主義文学への評価について、「私小説および私小説論」（1954）で、次のように寺田は言う。<sup>6</sup>

私小説はたしかに近代日本人の感性や心的状態、いなさらに、その生活形態のあるものを真実に表現してみたのであって、その表現には、多くの才能や特異な個性の持ち寄った多様性があり、それが私小説であるがゆゑに、否定されねばならぬといふわけには行かないやうである。（『評論 I - IV』、p. 49）

ここで私小説に自然主義文学が含まれることは言うまでもない。私小説の積極面を寺田は評価している。ここでの私小説とは、作家が自分自身の体験をフィクション化した文章である。明治以後の各時代の私小説作家が、その作品の中に自己の感性、心的状態、生活形態を反映させたということである。さらに、続けて寺田は秋声と正宗白鳥（1879-1962）に触れて次のように言う。

（…）しかしたとえば大正末年から昭和初期にかけて正宗白鳥や徳田秋聲が世に示した周辺に取材した私小説 [は] （…）人生の多くの場合のひとつ、暫定的な真などは到底言へない、作家の長い閱歴ののちに捕へた抜きさしならぬ人生の光景をゑがき出してゐる。（同、p. 49）

ここで秋声等の私小説が抜き差しならない人生の光景を描いたと寺田は積極的に評価する。<sup>7</sup>

さらに「荷風と白鳥」（1964）の中で、私小説を肯定する立場を寺田は示す。<sup>8</sup>フィクションの次元では「私」と「非私」との区別はなく、作品の出来、不出来が問題となると言う。私小説であろうとなかろうと、作品の質を問題とする立場を寺田は明確に示す。次のように彼は言う。



(…) 僕が根本的な錯迷を孕むやうに見える私小説論議に加はらないことができたのも、そのおかげ [荷風と白鳥とを対比させたことのおかげ] だったと言へる。(…) ひとは書き語りは始めるや否や現実そのものではない一つの別の、フィクショナルな世界の造り手となる。(…) 言語表現の場で、「私」「非私」を問ふのがそもそも無駄なことなのだ。ただその世界の造り方において、(…) 白鳥的と荷風の対比が成立つ基盤があるが、そのいづれにおいてもひとは「非私」であり、同時に「私」であるだらう。(『評論Ⅱ - I』、p. 155)

ここで、荷風と白鳥との対比は大きな問題であるので、これ以上の深入りをしない。寺田自身は、作品の出来、不出来を問題とするので、筆者が言及するような作者の自伝的な要素を彼は大きく扱わないことをここで付記したい。

次に秋声が描く社会について見る。『仮装人物』について、寺田は次のように指摘した。

(…) かの女 [葉子] が飲みこまれながら形作る社会も描き出されるに至らなかったのである。(『評論Ⅰ - Ⅱ』、p. 391)

ここでは主人公が小説の中で社会を形作るという考えが前提として寺田にある。『仮装人物』では主人公(葉子)が社会を形作っていないと寺田は言うのである。二葉亭四迷の作品に現れる社会との対比で、自然主義作家の作品の中の社会について、寺田は次のように述べる。「リヤリズムの諸相」(1951)の中の文である。<sup>9</sup>

彼 [非自然主義的リアリスト二葉亭四迷] においては作中人物とともに、それが生きる社会も作品のなかに積極的に作られ、自然主義者におけるがごとく、作中人物の環境が、文学外の力の作成に委ねられ、作者はそれに対しては全く素朴実在論的に対するのとは、根本的に作者の態度が異なっているのが分る。(『評論Ⅰ - Ⅱ』、p. 247)

ここで自然主義文学者が、作品の中の社会を変化することのないものとして

容認しているだけだと寺田は言う。

この内容と同じことを「新しい文学は必要か」(1960)の中で次のように言う。<sup>10</sup> 上のような社会の扱い方が自然主義文学者だけでなく、近代日本文学者全般にあてはまることとして寺田は次のように言う。上の引用では、二葉亭四迷の作品には社会が積極的に作られていると寺田は述べたが、ここでは近代日本文学者全般が社会を作品の中で積極的に作ることができなかつたと述べる。この点が、1951年の論と1960年の論との内容の違いである。

無論戦前〔太平洋戦争前〕にも、戦前から生きのびて来てゐる作家のうちにも、社会を小説制作の重要因子とする傾向があった。しかしその社会は、分析以前の、素朴實在論的な、あるひは一定の社会観で外から大づかみに規定された、つまり作家がその制作の過程において再構成するのではなく、その必要もない社会であった。いはば実体主義的に把握され、持ち来たされた社会で、沢山の影を帯び、要するに作者の自由にならぬもの、しかし有難く頂戴して意を安んじてゐられるものであった。(『評論Ⅰ-V』、p. 650)

以上の寺田の文から考えると、秋声は自分の生きている現実社会を小説に忠実に再現したということである。寺田が小説の中に描かれた「社会」と言う場合、バルザック(Honoré de Balzac[1799-1850])の作品での動的な社会を念頭に置いているかもしれない。それと比べると、秋声の作品では、社会が現状のままで静的に描かれているということのようである。<sup>11</sup>

#### 4

この節では、寺田が秋声論を発表した1948-1951年の前後とそれ以後の、寺田以外の批評家の秋声論を見る。さらに秋声の伝記に言及する。

秋声論として寺田に近い立場をとるのは広津和郎(1891-1968)の「徳田秋声論」(1944)である。<sup>12</sup> 広津は、秋声が庶民階級の日常生活と愛欲の世界を凝視したと言う(p. 362)。さらに『縮図』にどのような人物もとがめない一切衆生の肯定という慈悲心を見ている(p. 378)。広津は秋声より20才若い作家であり、同時に評論家として秋声の全作品を詳しく検討している。

寺田は広津和郎に対しては次のように共感をこめて言う。「広津和郎『自由と責任についての考察』」（1956）の中においてである。<sup>13</sup>

（…）秋聲や宇野浩二の文学に対して、繊細柔軟な鑑賞眼を〔広津和郎が〕はたらかせながら、その着いて行きがたい点を嗅ぎあててゐるのも、より濃い生の可能性とその反対のものの識別から出てゐると見ていいだらう。（『評論Ⅰ－Ⅳ』、p. 548）

寺田は広津が「絶対的な生命の尊重、人間の生きて行く可能性をいかなる理由によっても奪はず傷つけまいとする態度」（同、p. 548）を持つと評価する。

広津の論の発表と同じ年に、伊藤整（1905-1969）が短い「徳田秋声」（1944）を発表している。<sup>14</sup> 次のように伊藤は言う。

（…）作者がその筆の対象になる人間に愛情を抱いている観察を常にしているということだ。（…）この作家〔秋声〕は我執の人ではなくして観察の人だということになるであろうか。性格が弱くていて、しかも何ごとをも見て理解する人、そういう型の芸術家は極く近代になってから出て来たもののように思われる。（…）私は徳田秋声もその類に加えられると思う。（『伊藤整全集』19、p. 210）

ここで秋声が観察する人で、理解する人であるという指摘がある。これは広津の論に近い。

1948年に正宗白鳥の『自然主義文学盛衰史』が現れた。<sup>15</sup> この中で、正宗は秋声の晩年の長編小説二作『仮装人物』『縮図』の系列の小説を女性惑溺文学と規定し、次のように言う。

（…）夫人逝去後の晩年の秋声は、婦人に対して熱狂もし惑溺もしたのであった。若し夫人が長命を保ち、終りまで夫妻の同棲が続いていたなら、秋声の女性惑溺文学は現れないで、秋声文学の一面は失われたのであった。（…）境遇如何に依ることも多いのである。（『自然主義文学盛衰史』 p. 106）

秋声文学の特徴の一面が女性惑溺文学であると正宗は言う。その惑溺文学が

妻の死によってもたらされたところで、正宗は指摘する。

更に秋声が言う「自然主義の荘厳」について、正宗が次のような辛辣なコメントをする。<sup>16</sup>

(…) 秋声は「自然主義の荘厳」と云ったことがあったそうだ。徹底的真実の表現を荘厳と感じたのか。(…) 自然主義的人生観から云うと、荘厳というような言葉は空虚な形容詞で、人間の日常の実生活は荘厳視すべきものではないだろう。(同、p. 153)

この見解は、広津和郎の「慈悲」とか、寺田の「自然主義の荘厳を語る慈悲」とは対立する。ここには人間の日常の実生活に対するの正宗白鳥の冷めた目がある。ついで正宗は『仮装人物』は退屈したと次のように言う。この退屈感は筆者も共有した。

(…) 『仮装人物』は冷静な筆で印象的に書かれている。(…) 私はこの物語を読みながら退屈した。(p. 168)

この秋声への正宗白鳥の批評に近いのは、平野謙（1907-1978）の論である。1965年3月に発表した評論で、平野は秋声が現世的な作家であり、リアリストであると言う（『平野謙全集』7、p. 76）。<sup>17</sup> 破滅型でも調和型でもないリアリストの系譜の中に、平野は秋声を入れる。破滅型と調和型というのは近代日本文学界に対する、伊藤整の有名な分類である。ここで平野は伊藤の分類に加えて第三のリアリストという分類項目を提案する。次のように言う。

(…) また、秋声は「無による認識」や禅の思想などとは最後まで無縁な、現世的な作家だった、とみなす方がよりふさわしいのではないか。(同、p. 76)

このように秋声が仏教的な悟りのようなものに関係のない現世的な作家であると平野は言う。

さらに中村光夫（1911-1988）の『縮図』についての評論（1952）がある。<sup>18</sup>

この作品で秋声が文化の概念を否定していると中村は次のように言う。

「思想の範疇や固定の道徳や、あらゆる観念、概念を捨てて…」と広津和郎は云いますが、この態度は「徼」以来、秋声には一貫したもので、彼はちやうど荷風が「ひかげの花」の女性しか信じないと同様に、お銀といふ庶民の女の喜びや悲しみのほか、何物にも—おそらく文学にさへ—価値をみとめてゐなかつたので、この二人の強い個性の持主である老大家が、その芸術的信条の相異にかかはらず、結局文化の概念自体を否定したところに、晩年の心の棲家を見出したのは、我国の近代文化そのものの性格について、ひとつの否定的な暗示をなげかけるものです。（『中村光夫全集』 3、p. 387）

中村は、秋声が主人公の銀子の生活だけにしか価値を認めなかつたと言っている。筆者の秋声観は、正宗白鳥と平野謙の見方に近い。秋声が現世的な作家で、リアリストであるという考えに従う。しかし、秋声が文化自体を否定したとまでは言えないと思う。この点では、秋声が非知識人であったという寺田透の考えを筆者は取る。ここで正宗白鳥と平野謙の秋声観と、広津和郎と寺田透の秋声観との違いに触れる。これは文学作品の受容の問題である。ここでは寺田透の秋声観に限定するが、寺田の中に仏教的な価値観への関心があり、その関心が秋声の晩年の作品に仏教の慈悲を見るように寺田にさせているように思われる。正宗白鳥は、自身の回りの現実を冷徹に認識する特質を持つが、この冷徹な現実認識は秋声の言う自然主義の莊嚴を認めないと言える（この点もここではこの程度の簡単な説明に止める）。平野謙と広津和郎の体質的な特徴についての言及は今後の筆者の課題としたい。

秋声を含めた自然主義文学研究として、吉田精一（1908-1984）の『自然主義の研究』（東京堂、1955、1958）がある。吉田の秋声評価は広津和郎の評価に近い。吉田は秋声の短編小説を年代順に取り上げて分類し、的確に評価する。更に、片岡良一（1897-1957）の秋声批判をこっけいであり、ないものねだりであると次のように批評する。前者が『仮装人物』について、後者が『縮図』についての片岡の批評への吉田が行う批判である。<sup>19</sup>

「新生」[島崎藤村]の場合のように、強いて自己の理想に近づけ、導き、

救い、もしくは向上させようとする気込みは[秋声には]見えない。だがそれが悪いという道学者めいた非難(片岡良一)は滑稽で、人性を知らぬ石頭の批評というべきだろう。(『吉田精一著作集』8、p. 333)

この評者[片岡良一]のような立場に立てば、別の作品が出来たわけだが、それを秋声にもとめるのは、印象的自然主義の大家に性急な傾向小説を求めるようなもので「ないものねだり」というものだろう。(同、p. 336)

後者は、秋声に社会を変革する欲求がなかったと片岡が秋声を批判していることへの吉田の言及である。

秋声の伝記として野口富士男(1911-1993)の『徳田秋聲傳』(筑摩書房、1965)がある。この伝記によって秋声の『仮装人物』と『縮図』の成立の背景が分かる。以下、秋声の伝記上の事実を見る。秋声55才の1926年(大正15年)1月2日に、妻、はまが脳溢血で急逝した。この年に『仮装人物』の女主人公(梢葉子)のモデル、山田順子が秋声に接近してきた。山田順子は秋声よりも30才年下であった。秋声と山田順子が最初に出会ったのは1924年(大正13年)3月頃であった(『徳田秋聲傳』、p. 578)。山田順子は多情で、秋声と関係のあった2年間に、七人の男を渡り歩いた(同、p. 474、p. 478)。秋声と山田順子とは1928年半ば頃まで関係が続いた(同、p. 475)。

次に『縮図』の女主人公銀子のモデルである小林政子と秋声は1931年(昭和6年)夏に出会った。この時、秋声は60才で、小林政子は33才年下であった。1934年暮れに小林政子が芸者屋を開き、この芸者屋で秋声が時間を過ごすことが多くなった(同、p. 515、p. 583)。

本論でも述べたことであるが、秋声は山田順子に振り回された。しかし、小林政子とは平安な生活を持たたようである。このあたりのことを、松本徹は『徳田秋聲』(笠間書院、1988)で次のように言う。

女への執着が、[山田]順子の場合はへとへとに[秋声を]疲れさせたが、いまは[小林政子が秋声を]平穩に導くのである。(同、p. 327)

さらに野口富士男は『徳田秋声ノート』（中央大学出版部、1972）で、山田順子には近代的な所や知性があるが、一方、小林政子は生活者であると対比的に扱う（p. 210、p.225）。このような二人の女性との関係を秋声は晩年の二大長編小説に描いているのである。

## 5

1944年からの寺田の私的生活を次に見る。<sup>20</sup> 太平洋戦争の敗戦時、寺田透は30才であった。

1944年（29才）3月 石神以代子と結婚（1948年離婚）。

1949年（34才）2月 須田道子と再婚。

つまり、寺田が秋声の描く「愛欲の、悶えと濃さ」はわれわれ自身のものであると述べたのとほぼ同時期に、寺田は結婚、離婚、再婚を体験しているのである。

この体験を次の二つの私小説として寺田は発表している。即ち、「歲月」（1948）と「寝てゐる男」（1957）である。この二つの作品の間に9年の間隔がある。前者は離婚直後の発表である。後者は寺田42才の発表である。40才で神経衰弱にかかり、それがきっかけで離婚した元妻のことを想いだしたとすることである。神経衰弱については、「暮秋北窓試筆」（1971）に次のように書く。<sup>21</sup> これは寺田56才の文である。

15年前をかきな病気にかかった。40になったばかりのころである。(…)  
病名は神経衰弱だった。（『評論Ⅱ－Ⅵ』、p. 217）

この病気をきっかけに、元の妻のことを想いだしたことは、次のように「寝てゐる男」の中にある。

しかしかれが別れた妻のことを思ひ出すやうになったのは、[神経衰弱の] 病勢がゆるんで来てからである。（『評論Ⅰ－Ⅴ』、p. 56）

(1) 「歳月」(1948)<sup>22</sup>

この私小説では、妻との離婚について詳しい記述がないが、不和の原因に以下のように簡略に触れる。

(…) 妻との不和をますます深めて行った。彼女は小金をためた銀行業者の娘で、そして町場者だった。おれは自分の体内に百姓の血の流れる貧乏人の俵だった。おれはオブローモフシチーナ [オブローモフ主義] を愛し、彼女は打算を愛した。(…) 音楽家とは調子を合はせることを商売にしてゐる人間だとおれは思った。おれは音楽家がきらひになった。おれは彼女がかせいで来た金をどうしてゐるのか知らなかったし、知る気もなかった。これでは二重の意味で物質的結合にすぎないと思はれてゐた結婚生活の保てるわけがなかった。おれは妻と別れた。(『評論Ⅰ - Ⅰ』、p. 179)

妻が音楽家であったことが、ここに引用していない箇所にある。妻との経済的な違いと、これまでの生活環境の違い、さらに気質の違いがここに記されている。

寺田の育った家庭環境にここで一言する。寺田は自分の父のことを、「父祖の地」(1965)の中で次のように記す。<sup>23</sup> これは寺田50才の時の文である。その中で、寺田の本籍は茨城県竜ヶ崎市佐沼町にあることと、祖父が百姓であったことを彼は書く。これは上に引用した中にある「百姓の血の流れる」という部分と関係する。父は裁判所の書記であった。

僕の父は長いあひだ裁判所の書記などをして (…) 最後は横浜市の囑託として終った。きはめてくすんだ人間だった。(『評論Ⅱ - Ⅰ』、p.326)

寺田は茨城県に本籍があるが、横浜で生まれた。

(2) 「寝てゐる男」(1957)<sup>24</sup>

この私小説は主人公が神経衰弱で寝ているという設定で始まる。寺田が40才で神経衰弱にかかった時に、ほぼ10年前に離婚した元妻のことを想いだし



ている。元妻との関係が「歲月」よりも詳しい。

妻は美しいソプラノの声楽家だった。（『評論Ⅰ－Ⅴ』、p. 41）

このように元妻の職業を明記し、夫婦の不和に次のように触れる。

（…）要するにかれらは愛しあってみなかったのだ。

かれら相互のことより、かれらの背後につらなるものが、かれらの問題となり、そのためにかれらは口論した。

だからかれらは、長く一緒に暮せる男女ではなかったが、お互ひの育ちのことや血族のことや、それぞれの交際に対する批評をお互ひに行はなければ、いくらでもつづきうる関係にあった。（同、p. 52）

結局、不和の原因は二人が愛し合っていないことにあった。この引用文中で、長く一緒に暮らせる男女ではなかったと寺田は認めている。

別れた妻のことを次のように寺田は記す。

間もなくかれらは正式に離婚した。

かれを襲ふのはむろん愛情ではない。どんな種類の反感でもない。かって妻であった女が全く他人としか感ぜられない異様さである。（…）しかしそれがかれの、自分が現実と嘯みあってみない宙に浮いた歯車だといふ感じを消しはしないのである。（同、pp. 55-56）

これは私小説であるが、寺田はここで自己認識を表明する。元妻を他人と感じる異様さと、自分が現実から遊離しているという認識である。これはもちろん神経衰弱にかかっている時の感覚である。

上記の「歲月」の中で、人間が自分の観念を扱う際、生理（脳細胞の習癖）が関係すると寺田は述べる（『評論Ⅰ－Ⅰ』、p. 189）。そしていわゆる小説の中に作者の生理を感じたと次のように言う。

小説の作中人物が催す感情も、おれには大部分生理の仕業と見えて来た。作品の多くにおれは、作者の生理を感じた。文学は思へばきたならしいものだった。しかしこのきたならしさを除いて何の支へがあら

う。しかもそれは観念の菌糸が生へる腐木なのだ。(同、p. 180)

このように作家の生理を問題とする寺田が、徳田秋声の身边に取材した私小説と、秋声晩年の二長編に魅惑されたのである。秋声の愛欲に悶える生理に共感したのである。ここで文学を汚らしいとか、更に文学が観念の菌糸が生える腐木だと捉える寺田の感受性に注意を向けたい。

## 6

本論で、寺田透の徳田秋声論を検討した。寺田が秋声の小説に見た愛欲の悶えと濃さ、「非知識人」秋声という特質などを見た。更に秋声晩年の二大長編小説の女主人公の違いを寺田が分析するのを見た。これらの論の発表と、ほぼ同時期に発表した寺田の他の評論によって、自然主義文学者が日本人の感性と心的状態を表現していると寺田が評価するのを見た。更に、寺田の論が広津和郎の秋声論の流れに位置することを考察した。

本論の後半で、1944年から1949年の寺田の個人的な経歴を見て、彼自身の私小説二篇を検討し、寺田の批評家としての生理的な特質を考察した。結局、寺田透が徳田秋声の小説をどのように考え受容したかが本論の中心である。本論は、一面、文学作品の受容の問題を扱ったと言える。<sup>25</sup>

## 注

- 1 『言語文化』（同志社大学言語文化学会）第9巻第2号（2006）、pp. 304-321。
- 2 『群像』1967年3月初出。『評論Ⅱ-I』（1978）、pp. 125-137。以下、『寺田透・評論』から引用する。『寺田透・評論』（思潮社）は第Ⅰ期全7巻（1969-1975）と第Ⅱ期全8巻（1979-1981）がある。引用の際、『評論Ⅱ-I』のように表記する。これは第Ⅰ期第Ⅰ巻のことである。
- 3 『文明』1948年2月初出。『評論Ⅰ-I』（1969）、pp. 182-200。
- 4 『国文学解釈と鑑賞』1951年10月初出。『評論Ⅰ-II』（1969）、pp. 386-393。
- 5 『仮装人物』は『経済往来』（途中『日本評論』と改称）に1935年7月から1938年8月まで連載。1938年中央公論社から刊行。『縮図』は『都新聞』に1941年6月から9月まで連載。1946年に小山書店から刊行。両者とも岩波文庫に収録さ

- れている。『秋聲全集』全18巻（臨川書店、1974-1975）がある。上記二大長編は第17巻に収録されている。最近、『徳田秋聲全集』42巻（別巻1巻）（八木書店、1997-2006）が刊行された。
- 6 『国民の文学近代篇（2）』「岩波講座文学」5に1954年2月初出。『評論Ⅰ－Ⅳ』（1971）、pp. 47-83。
- 7 大正末年から昭和初期にかけての身辺に取材した秋声の私小説について一言する。『秋聲全集』（臨川書店）の第6巻以後の巻に含まれる短編小説がこれに当てはまる。私小説と客観小説（本格小説）とを含めて短編小説として優れているのは、例えば、第6巻では「風呂桶」、「未解決のまゝに」、「車掌夫婦の死」、「感傷的事」、「病人騒ぎ」、「乾いた唇」、「質草」、「恥辱」等がある。これらはストーリーが興味深い。用語について一言する。私小説は主観小説や心境小説とも呼ばれ、それに対して私小説ではない小説は客観小説や本格小説と呼ばれる。広津和郎「小説の主客問題、其他」（『広津和郎全集』8〔中央公論社、1974〕、p. 532）を参照のこと。初出は『新潮』1926年9月。
- 8 『荷風全集』10（岩波書店）月報に1964年4月初出。『評論Ⅱ－Ⅰ』（1977）、pp. 154-157。
- 9 『文学講座Ⅱ』（筑摩書房）に1951年6月初出。『評論Ⅰ－Ⅱ』（1969）、pp. 217-249。
- 10 『新潮』1960年1月初出。『評論Ⅰ－Ⅴ』（1972）、pp. 649-655。
- 11 寺田は、小説家が作品の中に社会を作りえているかどうかを問題とする。例えば、「リヤリズムの諸相」（1961）の中で、ドストエフスキー（1821-1881）について次のように言う。「(...) それにもかかはらず結局、彼〔ドストエフスキー〕の小説は、新しい社会を組織しえなかったといふことである。」（『評論Ⅰ－Ⅱ』、p. 238）寺田は同評論で、バルザック以後の小説は崩壊過程にあるというアルベール・チボーデ（Albert Thibaudet[1874-1936]）の説を引く。唯一バルザックが小説の中で新しい社会を作りえたと寺田は考えているようである。更に、二葉亭四迷や夏目漱石が小説の中に社会を作ろうとしたが、その社会は結果的に個人を圧迫する社会であったと「私小説および私小説論」（1954）の中で次のように言う。「(...) [二葉亭と夏目漱石]、すなはち意識的に社会と個人とを相関的に捉へ、いはばその小説の中に社会を組織しようとした作家が、確立された個人よりも、個人の存立を圧迫し、崩壊させるやうにはたらきかけて来る社会の桎梏 [を] (...) その著作の中でより強く感じさせる事態 (...)」（『評論Ⅰ－Ⅳ』、p. 60）。
- 12 『徳田秋聲集』「現代日本文学大系」15（筑摩書房、1970）、pp. 357-379（以下、引照のページ数はこれによる）。『広津和郎全集』9（中央公論社、1974）、pp. 395-427に収録。初出は『八雲』に1944年。
- 13 『群像』1956年7月初出。『評論Ⅰ－Ⅳ』（1971）、pp. 547-548。
- 14 『評論』（山海堂出版部）1944年12月初出。『伊藤整全集』19（新潮社、1973）、

- pp. 209-210。
- 15 『風雪』に1948年3月から12月まで連載。1948年11月に六興出版部から刊行。『正宗白鳥全集』12（新潮社、1966）、pp. 277-381所収。但し、引用は講談社文芸文庫（講談社、2002）による。さらに、『正宗白鳥全集』全30巻（福武書店、1983-1986）が刊行されたことを付加する。
- 16 「自然主義の莊嚴さ」は、例えば秋声の次の作品に現れる。「一つの好み」（1934年4月発表）に次のようにある。「(...) 彼 [庸三] は彼自身のぼろぼろになった自然主義から建直さなければならなかった。この頃になって漸と自然主義の莊嚴さにふれかけて来たやうな氣はするものの、もともと鈍根だから焦躁に駆られる氣持の苦しさといふものはなかった。」（『秋聲全集』8 [臨川書店、1974]、p. 204）ここで庸三という人物は、秋声自身のことと考えてよい。
- 17 『平野謙全集』7（新潮社、1975）、pp. 56-93。これには1953年、1965年、1969年、1973年に各々発表の四篇の秋声論が含まれている。
- 18 『現代日本小説大系』61「昭和10年代15」（河出書房）に1952年4月初出。『中村光夫全集』3（筑摩書房、1972）、pp. 384-387。
- 19 『吉田精一著作集』8「花袋・秋声」（桜楓社、1980）からの引用。片岡良一の秋声論は、『片岡良一著作集』7（中央公論社、1979）、pp. 215-282にある。片岡の『仮装人物』論は1956年に、『縮図』論は1946年に発表された。
- 20 「寺田透年譜」『現代詩手帖』6月臨時増刊「寺田透評唱」（思潮社、1977）、pp. 264-265。
- 21 『文芸』1971年1月初出。『評論Ⅱ-VI』（1980）、pp. 217-232。
- 22 『近代文学』1948年2月初出。『評論Ⅰ-I』（1969）、pp. 173-181。
- 23 『茨城県史研究』創刊号に1965年3月初出。『評論Ⅱ-I』（1977）、pp. 324-332。
- 24 『群像』1957年2月初出。『評論Ⅰ-V』（1972）、pp. 38-56。
- 25 寺田透の発表した評論では、バルザック、ヴァレリー、ランボー、ドストエフスキー、和泉式部、道元についての論が特に重要である。筆者は日本文学についての寺田の初期の評論を検討することを現在、考えて論文を発表している。寺田の全体像の提示を筆者は考えていないことを断っておきたい。

## Toru Terada's View of Shusei Tokuda

Hideho IDA

**Keywords:** literary criticism, Japanese literature, novels

Toru Terada (1915-1995) was both a literary critic and a scholar of French literature. He ranked as a critic after Hideo Kobayashi (1902-1983), who greatly influenced Terada.

In this article the author dealt with what Toru Terada thought of Shusei Tokuda (1871-1943) and also with Terada's own literary position. Terada made clear in Shusei's later novels (*Kaso-jinbutsu* [A Disguised Person] and *Shukuzu* [A Microcosm of Human Life]) the agony caused by insatiable lust and also thought that Shusei was a non-intellectual. When he published his article on Shusei Tokuda, Terada himself got divorced and also got remarried — he himself worried about a relationship with his partner. This article showed a relationship between Terada's sympathy for Shusei Tokuda and his own personal life.